

## PQR地区への手紙

### 問題の所在

ソ連におけるこの間の事態は、八九年事態の実践的帰結として見る事ができる。マルクスレーニン主義の篡奪としてのスターリン主義の命運は、自由を求める人民の手で最後の審判が下されたのである。だが人民の未来を指し示すマルクスレーニンの思想性はまだ失われたわけではない。アジアで、中米で、そして帝国主義足下のこの日本にも脈々と受け継がれているのだ。われわれはマルクスが、レーニンが、毛沢東が、ゲバラが、希求した社会をかならずや実現する。本稿はそういった意識性に貫かれた文章である。

H召還問題を契機として、PQR地区（注1）における共同主観の一定の混乱が生みだされている。実際大衆運動においては、必ずしも切迫している問題とは言えないのであるが、ここで取り上げるのは革命党としての組織運営の質の問題であり、対象変革における実践的な対処の問題である。なかでも組織問題を単なる作風の問題に帰し、ひどくは個人の人格問題に還元してしまうといった対処は、革命党としての組織形成の不熟性を見

ない訳にはいかない。

私自身、H同志とともに本部社防を担ってきた一人として、そしてなによりもPQR地区の構成主体としてこの間の事態についての自分なりの意見をまとめてみたいと思う。

H同志のPQR地区での活動について、彼と活動を共にしていた同志に言わせれば「自らの責任を回避し続ける」一言でいえば「無責任な男」であったそうである。会議での討論において意見を求められれば形式通りに「戦旗派的公式見解」をのべ、現実の組織とは接点を持ちえない関わりしか持てない保守的な主体であったことを強調している。そして召還してしまった事態に対しても、自らの主体を変革できなかった彼の自己変革性の欠如を主要には問題にしているに過ぎない。

そのように言ってしまうと、H同志はPQR地区の共同主観についてこれなかったことが原因という総括になってしまう。それではH同志が召還した後、以前の地区において復帰したということをどのように捉えるのか。これはなにもH同志の問題だけに限らず、このような総括のありかたは、困難を打ち返し、組織を前進させていくというよりも、逆に組織を混乱させ、活動家の消耗を引き出すだけの結果をしかもたらないのではないかと思う。

つまり、現実の総括は組織活動において生じた諸問題に対して当該地区および支部のメンバーがいかにしてそれを問題とし、いかにしてそれに関わり、その結果どのような成果を得たのかを明らかにするのであって、個人の思い入れや、主観といった組織活動から離れてその事象を問題にするべきではないのである。つねに組織性・共同主観性を内包させ、どうしたらこの困難を打開し組織を前進させられるのかという組織創造性を自らの内につちかうことが重要であると考ええる。

これは個人総括を行う場合でも同様であるが、「個人と組織」といった組織から自分を抜き出した一面的な問

題把握ではなく、組織の構成員として自分がその総体としての共同主観性のなかでそれをどう捉え、そしてどう発展させていくのかを問題にしなければならない。自分の失敗に対する懺悔であるとか、愚痴などはなんの発展にも繋がらず、かえって組織の混乱を生み出すだけである。問題なのは転んでも前向きに倒れるようなその意識性であろう。それを踏まえて以下具体的な検討に移っていきたい。

注1 — 「PQR地区」は筆者が当時所属していた地区組織のコード名。

なお以降に出てくる「DEF地区」は別の地区を指す。

## 対象変革と組織建設

活動家の主体変革を問題にする際にわれわれがふまえるべきは、相互の目的意識性を媒介した共産主義的団結の形成である。ここではブルジョア社会的な友達関係であるとか、上意下達のヒエラルキーなどの人間関係の止揚が内包されていかねばならず、つねにわれわれはそういったブルジョアイデオロギーの克服を問題にしなければならない。

「存在が意識を規定する」というマルクスの言葉を待つまでもなく、ブルジョア社会に定立するわれわれは、

必然的にブルジョア的価値観をその意識のうちに持つことは明らかである。その様な社会的諸関係の否定として、つまり現状に不満を感じ矛盾をとらえることのなかでわれわれは革命党に結集したのであり、われわれは現状社会の変革にむけて運動を構築していくのだ。

しかしそういった過程は個々の活動家の主体的な努力のみによっては必ずしも成就されるものではなく、実践を通じた運動の構築——組織の形成にその一切は規定される。つまり組織における共同主観の形成をこそ問題にするのでなければならぬのであってそこをはき違えてはならない。

例えば自分はイデオロギーが無いからといって悩んでいる人は、自分にイデオロギーが身につく事が問題なのではなく、他者に比して自分が劣っているという引け目から生起する劣等感に規定されているものである。革命運動におけるイデオロギーの必要性からの問題把握ではなく、ブルジョア社会的な競争原理にもとづく発想法をこそ問題にしなければならない。

そこでの陥穽としては、理論が純粹な理論として学習されていくのみであり、現実の実践に対しなんの適応もされていかないといういわゆる学者的な現れ方と、それさえもままならず理想と現実のあまりのギャップに茫然自失となり、消耗していつてしまうという発現のしかたに大きくは分かれていくのであるが、どちらの場合も本質的には同じ地平の問題であり、理論と実践の統一という問題が理解出来ない、理論主義的偏向の陥穽として捉えられなければならない。逆にいえば組織の中にあつて特定の個人のみが理論の主体化をなしたところで、それが組織総体に普遍化されていかないならば、そんな理論はそれこそ「死んだ教条」でしかありえない。

革命運動における理論はあくまでも「革命的实践の論理」以外のなものでもない。マルクス主義の主体化を通じ、実践に適用していくガイストを抽出することが理論作業の内実到他ならず、前述したように現状社会の変革をめざす運動をつうじて自らの、そしてなによりも組織の共同主観性における価値観をつちかいていく事、

そしてそういった普遍的人間への接近を実現するべく、その「導きの糸」としてのイデオロギーの主体化をなし、ていく事が求められる。

共同主観性の形成とは、そのような目的意識を内包した諸個人の有機的な結合の形態であり、ブルジョア社会の打倒、共産主義社会の実現という課題の実現を志向する革命党にあって、その課題実現のための団結の形成における意思一致の方法として把握されねばならない。

この間のPQR地区における組織実践的陥穽は、つまりこの共同主観の一定の混乱に規定されているのであり、この点を総括の俎上にのせることがゆえに重要と考える。今秋期天皇アセアン歴訪阻止―自衛隊PKO派兵反対の全人民的政治闘争を創出していくにあたって、組織内に生起する問題の整理をかならずや成しきり、打って一丸となって動員戦に勝利しようではないか。

## H問題における内容的根拠

12・23集会以後本部社防からPQR地区に移行したH同志が、なぜ半年あまりで召還してしまったのかの直接の根拠については私は知らない。だから地区の同志が、なぜあんなにも感情的な総括になるのかの根拠についても私にはわからない。（だからこそ客観的にこのような文章が書けるのかもしれないが）しかしそれ以前の四月を、H同志と本部社防を担い、そこでの討論を通じて得た彼についての印象は、確かに本人自身も言うよう

に「スタ官」であった。任務についても与えられた部門についてはきちんと処理するものの、それ以上の任務、つまり自ら創造していくという観点においては、全くといっていいほどなかったと言ってよい。自分としては当時そんな彼に苛立たしさを覚えたことも確かである。

会議などで何度かそういった彼の態度が問題にされ、批判されたこともあった。彼がDEF地区における組織的な総括を出せずにいたことも（支部の崩壊という事態の当事者という位置における総括であるが）そこには内包されていた訳であるが、彼はそういった自己に突きつけられる批判について、あまり主体的に捉えようとはしなかった。そういう意味では「責任を回避する」という批判は的を射ているのかも知れない。しかし十二月の彼が移行後に執筆した総括（『闘争』九十六号掲載の『指導主体としての自己総括』）において展開されている内容においてはそういった自己の分析が不完全ながらも提起されていたと思うのである。

曰く「私にとっての実践とは、組織の決定を「型」通りに実行していく」ものとしてあり「意志統一の内容を「一字一句間違えず」に意志統一すること：提起された内容を戦旗派の歴史性・論理性、または、その時々段階情勢から自分が考え会議で討論を提起するとか、または、他の支部メンバーがそのように考え自分の意見を表明することを求めていくよりも、一個の党的決定にそっていかメンバが「機能」していくのかだけを考えていた」。それが四ヵ月の本部社防ではっきりしたのでそういった陥穽をPQR地区における実践の中で克服していきたいといった内容である。

そういったH同志のスタティクな偏向は、同志に対して「対等に話すのは一〇年早い」等というDEF地区指導部の言葉にも明らかなように、DEF地区の共同主観の中で形成されてきたことは明らかであり、本人が言うように必ずしも彼自身の責任にすべてを還元してしまうことは誤った見解であるように思えるが、少なくとも自分自身の克服すべき課題性を突き出すという意味においては当為性・妥当性をもった内容である。つまり

彼自身、問題意識においては克服すべきもの、止揚の対象であった訳で、その意味で今回の事態は、本質的には自己変革というモメントが、結果的に貫徹されえなかったことになるのであろう。しかし見ておくべきことは、だからそれがすべて個人の問題のみに還元されていいという事にはならないということだ。

つまり今回の事態について、地区の同志の態度はあまりにも一面的な見方しかなされていないのではないかということである。確かにH同志の目的意識性の欠如は、批判されねばならない問題であると考えるが、だからといって結果からすべてを押し量って、一刀両断のもとに切り捨てるような、そんな非同志的な関わりがあるのだろうか。今回の対処には、そのような意識性があると思わざるを得ない。その事のほうがむしろ問題であると思うのである。

当該支部における問題の捉え方において、あまり詳しくは立ち入っていないが、問題の背景には活動家相互による不干渉という要因がある。「八年も活動している活動家なんだから」という具合に彼自身を物象化してしまい、一人の完成された人格者として、彼の変革には関わっていないことが文章では言われているのだが、しかしそれ以上の切開はおこなわれておらず、そういう現実の打開の為の方策はなんら成しえていなかったと言わざるを得ない。

ありていにいえば目的意識的な対象変革における意識性の欠如ということであろうか。運動を構築し、人民を階級的に獲得していくための論理、つまり革命党における「党のための闘い」たる党建設の中心において、目的意識的に組織を創造していくという観点の欠落を意味している。

そういった対象変革をなおざりにし、共同主観の形成を志向しなかったという点において、当該支部及び地区総体は責任を感じるべきである。しかしこの責任とはただの道義的な責任などではなく、階級的なものである。人民大衆を階級形成させていくわれわれの目的意識性から捉え返したところの責任性を実際問題にしなけれ

ばならない。

ここで言及したいことは、なにも責任をとってH同志に詫びよなどと説教するつもりはまったくないということだ。なぜH同志を召還させてしまったのかという根拠を明確化させ、そこに孕まれている実践的陥穽を、PQR地区の総体として総括の俎上にのせて欲しいと要請するものである。このままでは第二、第三のH問題を再生産させるだけであることは目に見えているといつてよい。

では以上をふまえて次にH問題の実践的課題とはなにかを、私見解であるが大きく二点にわたって提起しておきたい。これを通じPQR地区における、さらに深化した討論を期待するものである。

## H問題の実践的課題性

まず第一の課題として提起したいことは、論争し、批判するレーニン主義党としての作風を更に押し進めることである。しかしこの場合の論争とは内容の媒介しない形態論的な論争ではなく、相手を獲得していく意識性を媒介した論争でなければならないということだ。

認識論的な自己（＝主体）と対象（＝客体）との関係は、主体と客体の相互の目的意識的な関わり——共同主観の形成を通じて相互が同時に変革されていくものとして把握することができる。実践的にいっても自己が対象に対し変革を前提に関わるためには、まずもって対象に内在化した主体における目的意識と、対象の意識



との共同主観の形成を成していかなばならない。

対象の置かれている政治・社会的諸関係を把握し、対象の立場で思考し、その後己に立ち返って問題をとらえかえすという発想に立たない限り、相互の共同主観の形成はあり得ないのであって、主体形成途上の自己の途上性をも見据え、相互に変革されていくという関わりをもつことがゆえに重要になるのである。

図式化していえば、 $S (Subject \parallel 主体) \uparrow \downarrow O (Object \parallel 客体) \vee S \downarrow O$ という関係になるわけであるが、一般的にいつて主体からの一方的な客体への働きかけは主体における一個の主観をしかともなわぬものであり、スターリン主義的な組織集約の在り方はこのような発現の仕方をとるものである。

方法論的にこれを論じるならば、一言でいつて相互批判―相互止揚という構造、つまり自己と対象との交通を媒介にした内容的批判により、相互の主体的向上を目的とするということである。しかしその場合、批判の自身が問題となる。

目的意識的な批判の在り方とは、相互の飛躍を目的とした意識の在り方に規定される訳であり、ブルジョア社会的に認知されている誹謗であるとか中傷という、相手が疲弊したり消耗してしまうような批判であってはならないのである。即時的な感情や被害者意識などをここですべからく否定しているのではないが、そこでの自分や対象の過渡性を踏まえ、そういったブルジョアイデオロギーを止揚していく位置において批判を行っていくべきなのだ。

つまりいかにして相手を内容的に伸ばしていけるのだろうかという関わりが重要である。H同志であれば、彼の日常的な行動に発現する実践的陥穽を具体的に指摘し、内容的な解明を提起することによって毛沢東風に言えば「病をなおして人を救う」ことになるのである。「そんなこと言ったら嫌われる」であるとか、人間関係的

な確執を敬遠するがゆえに批判をためらったり、召還したという結果をもって「所詮あいつはああだった」式に問題を捉える在り方からわれわれは自由にならねばならないのである。

レーニン主義的な討論の在り方としての、同志的・説得的・論証的なという意識性は、ただの形態の問題ではないのである。とかく優しく・分かりやすく・論理的にいうこと自体が問題とされがちなのであるが、中身としての内容が問題とされずにそれだけが抜き出されるならば、なにも意味がないのだ。

それとは逆に怒りをぶちまけるみたいに、これも形態論的な討論として、批判ならぬ非難を言う傾向もある。他者に対する自己保身の表出としてあるこの現れは、討論における批判の突きつけが単純な自己否定としてしか受け取られず、ついには相手の意見を内容的にとらえかえすことができない、感情的な罵りになってしまう問題である。

両方の討論における陥穽について共通することは、討論の中身の不在ということに尽きる。討論というものが組織的にどういったものとして、個々の活動家の意識のなかに普遍性を有しているのが問題とされねばならないのに、形態としての討論の自由ばかり保障しようと、それでは意味がないのではないだろうか。つまりその討論を通じて獲得されるべき観点の意識の上での明確化と、実践を通じての再認識―総括討論を通じての観点整理を内在化させた討論の組織化が求められるのである。

それをふまえてH問題における実践的課題として第二にふまえるべきは、組織としてのキャパシティ、つまり組織における柔軟性の問題である。

われわれは高卒現場労働者を主要な骨格に持ち、プロレタリア的な質を組織的な作風とすることにおいて党的伸長を成してきた。当然そこではインテリ主体のZなどとはことなる問題意識を生みだしている。あくまでも純粹世界の観念論を振り回す彼らとは違い、現実の諸問題からマルクス主義的な対自化を成し、実践的な対処

を模索していく実践的唯物論者としての価値観を我が物とすべく、イデオロギーの主体化をなしていくのである。前述したように諸個人のブルジョア社会における立脚点はそれぞれ違うわけで、そこから組織に結集して、価値観を我が物とすべく精進していく過程は当然ながら千差万別であるはずである。われわれはブルジョア社会のような相手を蹴落とし、蹴散らしていく社会を止揚していくとするわけで、そういった価値観から解放されていくことが求められるのである。

組織とは総体としてそのような価値観を形成していく共同体であり、ブルジョアの価値観を色濃く有している者も当然内包している、また人民を組織していくと志向していく観点からいえば、彼（彼女）をいかにして階級へと形成していくのかを具体的・現実的課題として設定していかない限り内容的に行き詰まるのは目に見えている。

いわんや戦旗派入門コースなるものが存在するわけでもないのであるから、当然教条的・形式的な対象変革の方法などありえない訳である。そういう中で人民を獲得し階級形成を措定しようとするのであれば、組織者としてのわれわれの高度な目的意識はもちろんのこと、人民に分け入っていける組織総体としての柔軟性が問われるのである。

以前支部において、一部の優柔不断な意識で組織に関わる同志に対し、分岐をつくっていく関わりが取られたことがある。組織を取るのか市民社会を取るのかという選択を迫ったものとして当時自分自身は思っていたし、そのように関わっていた。結局その同志は召還してしまったのであるが、今とらえかえせば、なにもそこまでやることはなかったのではと思う。

なぜかといえば、そこではなにかしら理想的な活動家なるものが措定されており、それにあわせて活動家が作られて行くといった関係にあったと思われるからである。現実の活動家といえは聞こえがいいが、組織構成員は

すべてがすべて理想的な主体などではなく、ブルジョア的要素を色濃く持った共産主義者としては不完全な主体でしかないのである。

そのような不完全な主体が飛躍していく構造を保障していくものとして、共同体としての組織が存在しているわけで、そのような組織の在り方をわれわれは創造していかねばならない。

以上が私としてのこの間思ってきた問題点である。まだまだ観念的で自分でも齒がゆい思いであるが、自分なりの思想的なとらえかえしはほぼ出ていると思う。前述したがこれを問題点としながら地区総体において更なる総括の深化を待ち取って欲しい。

(1989.12)

